

重商主義と称される包括的な概念

蔵谷 哲也

Mercantilism, So Called : A Comprehensive Designation

Tetsuya KURATANI

ABSTRACT

Mercantilism is a collection of often mutually contradictory ideas. By and large, it asserts that the wealth of a country consists in the quantity of precious metals it possesses and that the measure to increase that wealth is to try to keep a balance of trade surplus. Even today, the idea itself still sticks to the heart of people at large, though it runs contrary to the teachings of modern economics.

KEYWORDS : mercantilism, mercantile system, balance of trade

1. はじめに

本稿の目的はいわゆる重商主義の多様性を指摘し、検討することである。なぜなら、重商主義という用語でその内容を要約するには、様々な困難が伴うことがあるからである。主義という用語から示唆されることは、精密で限定的な原理に基づく国家的規模の経済制度の組織的な働きを想定しがちであるが、そう考えると、誤解を招くであろう。ただし、細部は異なるとしても、歴史的な思想の傾向を表現するには有益な用語でありうる。歴史家の中には包括的な称号、例えば、暗黒時代 (Dark Ages)、文芸復興 (Renaissance)、重商主義 (Mercantilism)、旧体制 (ancient regime)、啓蒙運動 (Enlightenment) を使うことを疑問視する人がいるという¹。しかし、付けられたラベルの不具合を見つけることは、明らかにより優れた代替物を見つけることよりもずっと容易なことである²。ある説によると、16~18世紀の間の主要貿易国の経済制度のことであり、国富と国力は輸出を増加させ、その代償として貴金属を収集することによって最善に強化されるという前提に基づいているという³。重商主義の概念とは、学者たちによる発明であり、過去の無限の複雑さを単純化する試みでもある。単純化する試みが多数なされても、結果的に混乱を増し加えるだけかもしれない。

極端に言えば、自己の特定の目的のために、重商主義という用語に意味やより特定の展望を自由に与えることができよう。コルベールやクロムウェルが存在したという意味では、重商主義は決して存在しなかった。それは、歴史上の特定の時期をより明白に理解する上での有益な概念である。そして、経済政策の歴史における一つの局面であるといえる⁴。

2. 貿易収支の黒字と赤字

アダム・スミス以前の英語経済文献では、最も普遍的で強調された原理は、貿易差額黒字を持つことの重要性であった。そして、貿易収支 (Balance of Trade) はいわゆる重商主義の時代と言われる17~18世紀の中心的経済概念である。今日では、貿易収支とは、国際収支 (balance of payments) を構成する様々な勘定の一つでしかない。ある一定期間における一国の輸入総額が輸出総額を大幅に上回り、この状態が長期化すると、貿易相手国二カ国間での政治問題が生じることがあった。これによって1980年代の米国は日本や中国との貿易関係が複雑化したことが記憶に新しい⁵。

「favorable balance of trade」という用語は貿易収支の黒字と日本語に翻訳されるが、favorable は形容詞で、「有利な」や「有益な」という意味を持

つ。一方、「unfavorable balance of trade」は「貿易収支の赤字」とか「輸入超過」と翻訳される。銀行業や実業界と同じ意味でこうした用語を理解しがちである。しかし、こうした用語は単純に慣習化されたものであり、商品輸出収支が有利 (favorable) であっても不利 (unfavorable) であっても、一国の経済厚生 of 真の指標ではないし、外国貿易からの利益の真の指標でもない。この有利とか不利という考えは重商主義者に起源があることを根拠として、この用法を正当化している。その結果、古典派経済学の文献に深く根を下ろすようになり、数世紀にわたるこの用法は実業界、銀行業界、そして専門用語として、しっかりした足場を築いてしまったので、この用法を選択せざるを得なくなったという⁶。今日、一国の貿易収支の黒字または赤字というニュースを聞くと、黒字であれば、有利であり、赤字は不利という考えが無意識に働きがちではないか。これはとても残念なことである。なぜなら、1 国の貿易収支尻とは、ある特定期間におけるある国の多くの経済主体の、様々な国々向けへの輸出活動の総計と様々な国からの輸入活動の総計を比較したものであり、一国と他の一国との二か国間における取引の結果を示すものではない。従って、ある一企業は赤字であり、他の企業は黒字であるという指標ではなく、ある国にある様々な企業の国境を越える取引を集計すると、その結果として、輸出総額と輸入総額の差が算出され、この差を赤字とか黒字とする。さらに単純化すると、貿易は日本という国家と、米国という国家間の取引ではないので、日本の貿易収支黒字や赤字は、統計上の尺度であり、価値判断をふくむものではない。特に、一定の期間中の取引を記録したものであれば、期間の長さによっては、貿易収支尻はマイナスになったりプラスになったりする。

重商主義者とその同時代の人々は、いわゆる貿易収支と称するものを叙述するために、様々な表現を用いた。「in our favor」という語句が、一国の外国貿易の特定の条件が望ましいとか望ましくないという考えを示すために使われた⁷。類似した用法は現在でも使われている。1961年2月6日、ケネディ大統領は議会への特別教書 (special message) で「保

護貿易的手段は逆効果をもたらすと考えられる。国際収支を再調整するために、米国は輸入制限をするよりもどちらかといえば、輸出を促進するであろう。」ケネディは自由貿易を支持するという行政の立場にとどまり続け、さらに次のように述べた。「保護貿易主義に戻ることは解決策ではない。そのような選択は報復を引き起こすであろう。そして、現在、顕著に有利である貿易収支 (balance of trade, which is now in our favor) は、米国にとって不利なものとなされ (could be turned against us), ドルに対して破滅的な影響を与えるであろう。」と述べた⁸。このように、貿易収支の状態は有利であるとか不利であるという考えは現代でも根強く残っている⁹。

3. アダム・スミスと重商主義

重商主義の一つの意義は、経済的自由主義出現のきっかけを作ったことであろう。経済的自由主義とは、経済学に関する組織的考察に関して正確な形態で『諸国民の富』において明確化された。市場をいかに扱うかという問いに対する答えを政府が追及するにおいて、自由放任という答えを与えた。政府の統制下から大部分解放された状態で、民間部門において国際貿易を行うべきであるということが主張される¹⁰。重商主義原理に対する厳しい批判は英国古典派の経済研究者たちによって概してなされてきた。彼らは通常、アダム・スミスの説明と、重商主義原理の内容に関する情報として、19世紀の無名の大量資料に依存したのである¹¹。

17世紀と18世紀の間に出版された多数の経済小冊子、パンフレット、書籍から、重商主義制度 (mercantile system) を創り出したのは、重農主義者とアダム・スミスであるという共通認識があるという¹²。すなわち、リップソン (Lipson) によると、16~17世紀の著述家たちはこの用語を使わなかったし、仮に使われていたとしても、きわめて稀であろうということだ¹³。こうした文献の大部分は英語文献である。重農主義者ミラボー侯爵 (マルキ・ド・ミラボー) の1763年の『農業哲学 (Philosophie Rurale)』に

systeme mercantile という用語が初めて登場した。この書において、ミラボーは、貨幣の輸入から一國は利益を得ることができるという思想を決定的に参照している。ということは、統制的貿易制度や産業政策を叙述するために、ジャッジズ (Judges) によると、スミスはこの文献を読んだとされる。スミスはこの用語をこの書籍からおそらく取り出したのであろうという¹⁴。一方では、スミスがフランスに出かけて、重農主義者たちと交流を持つ以前に、スミスが行った法律学と政治経済学の講義の内容から判断すると、スミスの制度は重農主義者の考えから取り出されたものではないことが示唆されるという見解もある。それは、グラスゴー大学時代のスミスの法学講義を学生がとったノートが1895年に見つかり、後に公刊されたことによる。これによると、スミスの考えの主要部分は重農主義者と知り合う前に形成されていたことが示唆される¹⁵。スコット (Scott) によると、訪仏に先立って、アダム・スミスは重農主義によって影響を受けたという決定的な証拠はないが、同時に、フランスの影響を受けているという。その結果、スミスと重農主義者たちは両者とも、共通した源から、一般的な刺激を受けているという¹⁶。

1776年の『富国論』によると、保護と経済統制政策を強調していることが諸文献の共通認識である。貿易収支黒字原理は素朴な信念に基づいているとしている。重農主義者とスミスは重商主義制度は富と貨幣を混同した誤謬を基盤としたという結論付けをした¹⁷。富は貨幣すなわち、金や銀から成り立っているという概念は大衆受けし、通商の手段そして、価値の尺度としての貨幣の二重機能から当然のごとく派生した。通商の手段としては、他の財を手段とするよりも、通貨を持っていれば、機会があるごとに、より容易に他のものを入手することが可能である。多額の金を持つ者を金持ちと呼び、ほとんど金を持たない者を貧困な者と呼ぶことがある。豊かになるということは金を得るといっても差し支えないであろう。つまり富と貨幣とは同義語とみなされよう。

重商主義経済学者たちにとっては、17～18世紀に

おいては、金が権力を代表するものであった。スミスによると、主要重商主義者はトマス・マンであり、その声明書は『外国貿易によるイングランドの財宝 (England's Treasure in Foreign Trade)』であるという¹⁸。『諸国民の富』の記述によると、マンのこの書籍はイングランドのみならず、すべての他の商業国の政治経済学における根本原理になったと評している¹⁹。

自由放任経済においては、私利の衝動が公益を生み出すことを信じていたが、製造業者のような民間団体は公益に反することがありうることを理解することができた。独占と重商主義には概して反対であった。しかし、世界の現状において、場合によっては必要な国家的経済武器として、航海条例 (the British Acts of Trade) のような自由貿易に対する制限を認めていた²⁰。スミスは絶対的な意味で自由放任を信奉していたわけではないようだ。貿易を促進するために、運河や埠頭の建設のような公共事業における活動の場が政府にあると考え、ある種の国内産業を保護するために、外国貿易を規制することにも政府の活動の場があるとみていた²¹。

4. 金に対する貧欲

この用語の概念が重要視されてきたのが、16～17世紀における重商主義の進展の中においてである。特にイングランドの重商主義者の文献の中に見られる記述では、次の原理の記述が多い。輸入よりも輸出が超過することが決定的にイングランドにとって重要である。なぜなら、金銀の鉱山がない国や、植民地で金銀を産出しない国にとっては、そのことが、貴金属のストックを増大させる唯一の方法であるからだ²²。その他のありうる手段としては、他の国からの贈与物や入手した獲得物によって国を富裕にすることができるけれど、こうしたことが本当にあるかどうかは不確実で、考慮する余地はほとんどない²³。だから、財の純余剰物を輸出し、その差額を金銀地銀や正金で受け取るのである。基本的財宝を合法的に獲得し、蓄積する唯一の主要手段は貿易収支の黒字である²⁴。そして一方では、貴金属の流出をもた

らすものであれば、貿易収支の赤字は重大な危機であると考えられた。

その他の貿易収支の黒字を獲得する手法としては、製造品は、製造品に具体化された原材料よりも通常より価値があるので、重商主義者は、貿易収支の黒字を増加させるため、原材料の輸入と製造品の輸出を優遇した。この思想の流れから、製造業は農業よりも国の繁栄を助長するという結論を導いた²⁵。工業化は現代でも発展途上国にとっても重要な政策課題である。

欧州人による新世界の発見は貿易の拡大を導いた。欧州にとっての世界の大きさは、コロンブスの1492年の初航海から10年未満で、2倍に膨れ上がった。歴史上かつてないほど、地理上の知識が突然そして驚異的に拡張したからである。そして発見のための初期の航海の背後にある主要な動機とは、利益の見込みのあるところを航海することであった。コロンブスは、マルコ・ポーロの中国の金に関する報告に強く印象づけられて、以前は陸路によっては達成できなかったことを海路によって、大規模に達成することを願っていた。1506年の死に至るまで、コロンブスはインド大陸の西側と信じられていた西インド諸島は、日本、中国、インドの富への有益な足掛かりにすぎないと頑なに信じていた。発見の航海を促した主要で不変な刺激とは、貿易から生み出される利益であった。欧州の富裕層は、この富に対する貪欲を持っていた。それゆえ、貿易を通しての貴金属の獲得は人の貧欲に駆り立てられたといえる²⁶。

5. 結びに代えて

貿易全体を増加させる試みと輸入を阻止するためのまない努力の関係の中に矛盾が存在する。輸出分に相当する輸入を必要とすることなく、輸出することが可能であると信じられたこと。この信念では、貿易当事国間の為替の関係に対する、貴金属の輸入余剰の持たなければならない影響を無視していた。もう一つの矛盾は貿易を再活性化する試みがなされる時に、通商戦争を継続する試みが同時に絶え間なくなされていたことである。重商主義者は自国の貿

易のみに関心があり、他国からすでに獲得したもので、これから獲得できると望めるものに関心があり、世界貿易全体のことはほとんど顧みなかったようである。通商戦争からもたらされる貿易封鎖手段に世界のすべての国々は大いに苦しんだことは間違いない²⁷。

今日、重商主義という用語は現代の経済状況で使われることは稀である。なぜなら、重商主義は歴史的な脈絡を理解して、その内容を理解できるものだから。この用語に多少なりとも意味が類似しているのは、保護貿易主義である。

重商主義とは、政府による市場統制を主張するものであり、特定の所得分配を発生させることを結果としてもたらず。より大きな消費と効率という価値よりも、社会的公正、国家の発展、自給自足の価値を追求した。規制されていない貿易は、国際平和の保証というよりは、国家権力と国防に対する脅威と考えた。

外政や経済の現行の状況に反応して、重商主義は進展してきた。19世紀中ごろまでに重商主義を支えてきた価値や理論は、崩れ始めた。代替策を制限していた市場の諸条件や、重商主義支持者や反対者の政治権力が全て変化したからである。

貿易の内容は、その貿易がいかに規制から解放されているかによって、貿易の自由度を測ることができる。そうすると、尺度の一方の端にあるものが、自由貿易であり、反対の端にあるものが、貿易禁止と考えられる。貿易を妨げるものは、関税と非関税障壁に大分類できる。関税障壁を削減する動きは、先進国間ではなされてきた。一方では、非関税障壁は、何をそれに含めるかによって、貿易の流れを止めるか、または流れを遅延させることができる。国際貿易の理論では、輸送費は0として扱われることがあるが、輸送費は最終的な消費者価格を高騰させるという意味では、貿易障壁の一つとして考えられよう。一例を挙げると、マテルのパービー人形は、生産費が1ドルであるが、米国では、この人形が約10ドルで販売されている。輸送、マーケティング、卸売り、小売りの費用が90%に相当する従価税に相当するという²⁸。

重商主義が直面した類似的な諸問題は現代においても再現している。貿易赤字、外国依存、政府歳入の必要性、幼稚産業起業の困難さ、すべての市民に対する安全保障の提供、対外政策目的のための貿易の利用、諸外国の不正慣習。こうしたものは現在突然生じたものではない。海外に食料依存をすることの恐れは、完全な自給自足を導くことはないだろうが、イラクがクウェートの大規模な埋蔵石油資源を獲得することを目的とした湾岸戦争が示唆することは、他の諸国がレアアースや原油のような戦略的重要財の貿易を統制することがあるなら、代替案を策定する必要がある。例えば、かかる財の貿易依存度を下げるとか、財供給国を極力分散させることである。土地所有貴族 (landed aristocracy) や国王のための歳入についてもはや腐心する必要はないが、政府は歳入が必要であり、いくつかの利益団体は他の団体よりもより多くの配慮を政府から受けるであろう²⁹。このように、重商主義の要因に含まれる考えは、過去の歴史ではなく、現存している。

重商主義の源は金を蓄積したいという守銭奴的な生来の性癖から来ていると考えられる。その上、飢饉や戦時における突然の備えに対する国の保護能力のために金を蓄積することでもある³⁰。国内経済であれば、生産して消費すること。そして労働して支出することが容易であるかもしれない。しかし、生産と消費活動が国境を越える場合、かかる経済活動をするを国内活動と同様にはできないようである。多くのマスメディアは、貿易収支が有利であれば、満足であろうし、輸出機会は輸出国にとって有利であり、国内の雇用の維持・拡大に貢献すると考えがちである。国内取引はとりあえず仲間同士の取引であるが、国際取引とは、得体の知れない人との取引であるから、重商主義の本能が働くのであろう。

貿易差額の用語は現在でも使われているが、未だに多くの誤解を招き、混乱を与えている。なぜなら、英語では貿易差額を表記する際に、favorableまたはunfavorableという形容詞を使うことが多い、日本語でも貿易収支の赤字は不利、黒字は有利という印象を今日でも与えている。貿易収支の黒字 (favorable balance of trade) の重要性はヒューム、

スミス、リカード、ジョン・スチュアート・ミル等の貿易収支調整機構の理論が登場するまでは、比類のないままであった³¹。

参考文献

Anderson, James E. and Wincoop, Eric van. "Trade Costs." *Journal of Economic Literature*. vol.XLII (September 2004). pp.691-751.

Carey, John. *An essay on the coyn and credit of England as they stand with respect to its trade*. printed by Will. Bonny, and sold by the booksellers of London and Bristol in Bristol. 1696.

The Columbia Encyclopedia, "mercantilism", "Smith, Adam", "balance of payment", 6th ed. The Columbia University Press. 2015.

Conti, Delia B. *Reconciling Free Trade, Fair Trade, and Interdependence: The Rhetoric of Presidential Economic Leadership*. Westport, CT.: Praeger. 1998. p.34.

Devey, Joseph. *The moral and historical works of Lord Bacon Francis Bacon including his essays, Apophthegms, Wisdom of the ancients, New atlantis, and Life of Henry the Seventh with an introductory dissertation and notes, critical explanatory, and historical* published by Henry G. Bohn in London in 1852.

Earle, Edward Mead. "The New Mercantilism". *Political Science Quarterly* 40. 4 (1925): pp.594-600.

Davies, Glyn. *A History of Money: From Ancient Times to the Present Day*. Cardiff, Wales: University of Wales Press. 2002. p.177.

Fetter, F. W.. (1935). The Term "Favorable Balance of Trade". *The Quarterly Journal of Economics*, 49(4), pp. 621-645.

Grampp, William D.. "The Liberal Elements in English Mercantilism". *The Quarterly Journal of Economics* 66. 4 (1952): pp.465-501.

Haney, Lewis H. *History of Economic Thought: A Critical Account of the Origin and Development of the Economic Theories of the Leading Thinkers in the Leading Nations*. Revised Edition. New York: Macmillan. 1920. p.103.

Johnson, H. G. "Mercantilism: Past, Present, Future (Presidential Address)", *The New Mercantilism*. edited by Johnson, H. G. Oxford: Basil Blackwell. 1974. pp.1-19.

Judges, A. V. "The idea of a mercantile state", in D.C. Coleman (ed.), *Revisions in Mercantilism*. London: Methuen 1969, p.38. Judges refers to a passage in Smith, vol. II, p.177 (Cannan's edition)

Keynes, John Maynard. *The General Theory of Employment, Interest and Money*. New York: Harcourt, Brace, and Company. 1936. p.iii.

Kindleberger, Charles P. *World Economic Primacy, 1500 to 1990*. New York: Oxford University Press. 1996. p.129 ; pp.117-8.

Lipson, E. *The Growth of English Society A Short Economic History*. London: Adam and Charles Black. 1949.

Lipson, E. *The Economic History of England. Vol.III: The Age of Mercantilism*. sixth edition. London: Adam and Charles. 1956.

Magnusson, Lars. *Mercantilism: The Shaping of an Economic Language*. New York: Routledge. 1994. p.25.

Magnusson, Lars. "Introduction", *Mercantilism Critical Concepts in the History of Economics*. New York: Routledge. 1995. p.1.

Magnusson, Lars. *The Tradition of Free Trade*. New York: Routledge. 2004. p.73.

Moon, Bruce E. *Dilemmas of International Trade*. Boulder, CO.: Westview Press. 2000. p.34.

Mun, Thomas. *England's Treasure by Forraign Trade or The Balance of our Forraign Trade in The Rule of our Treasure. 1664*. New York and London: Macmillan and Co. 1895.

Graham, Frank D. "The Theory of International Values Re-examined," *Quarterly Journal of Economics*. Vol. XXVIII (November, 1923). pp.54-86.

Robbins, Lionel. Medema, Steven G. Samuels, Warren J. *A History of Economic Thought: The LSE Lectures* Princeton, NJ: Princeton University Press. 1998. p.125.

Rashid, Salim. *The interpretation of the "balance of trade" a "wordy" debate*. Urbana-Champaign: College of Commerce and Business Administration, University of Illinois at Urbana-Champaign. 1989.

Scott, William Robert. *Adam Smith as Student and Professor: With Unpublished Documents, Including Parts of the "Edinburgh Lectures", a Draft of the Wealth of Nations, Extracts from the Muniments of the University of Glasgow and Correspondence*. Glasgow: Jackson, Son & Company. 1937. p.xvi.

Smith, Adam. *An Inquiry into the Nature and Causes of the Wealth of Nations*. edited by Bullock, C. J. New York: P. F. Collier & Son. 1909. p.326.

Tame, Chris R. "AGAINST THE NEW MERCANTILISM: THE RELEVANCE OF ADAM SMITH," *Il Politico*. Vol. 43, No. 4 (DICEMBRE 1978), pp. 766-775.

Viner, Jacob. *Studies in the Theory of International Trade*. London: Allen & Unwin. 1960. p.3.

Wallerstein, Immanuel. *The Modern World-System III: The Second Era of Great Expansion of the Capitalist World-*

Economy, 1730 S-1840 s, with a New Prologue. Volume 3. Berkeley, CA.: University of California Press. 2011. p.24.

Whittaker, Edmund. *Schools and Streams of Economic Thought*. Chicago: Rand McNally. 1960. p.31.

Wilhite, Virgle Glenn. *Founders of American Economic Thought and Policy*. New York: Bookman Associates. 1958. p.64.

註

- 1 Kindleberger, p.129.
- 2 Judge, p.59.
- 3 "mercantilism," *The Columbia Encyclopedia*; Lipsonによると、16, 17, 18世紀における国家の通商政策を示すために概して用いられる用語である。Lipson (1956), p.1.
- 4 Haney によると、重商主義は Mercantile System, Colbertism, Restrictive System, Commercial System, Mercantilism と名付けられている。p.103.
- 5 *The Columbia Encyclopedia*. "balance of trade,"
- 6 Fetter, pp.621-2.
- 7 Carey, p.20.
- 8 Conti, p.34; その他の同様な用例は Wallerstein, I., p. 24.
- 9 固定為替相場制でないとするれば、国際収支が慢性的な赤字の場合は、その国の通貨の安定性に影響を与えることは言うまでもない。
- 10 Moon, p.33.
- 11 Viner, p.2.
- 12 Magnusson (1995), p. 1; mercantile system とはスミスが初めて使った名称であるという主張もある。杉山訳の『国富論』の注259ページ。一方、ヴァイナー(Viner)は重農主義者の用例に従って、"commercial system" または "mercantile system" と名前を付けたとしている。Viner (1937), p.3.
- 13 Lipson (1956), p.1.
- 14 Magnusson (1994), p. 25.
- 15 Lionel Robbins; Steven G. Medema et al. pp. 127-8.
- 16 Scott, p.xvi.
- 17 Smith, p. 326. また『富国論』においてアダム・スミスによって重商主義は完全に打ちのめされたこと Johnson は評価している。Johnson, p. 2.
- 18 おそらく1630年頃、書かれ、本人の死後、その息子によって1664年に初めて出版されたという。Mun, p.vi.
- 19 Smith, p.331.
- 20 *The Columbia Encyclopedia*. "mercantilism,"
- 21 *The Columbia Encyclopedia*. "laissez-faire,"

- 22 貴金属の鉱脈があるなら、その採掘と精錬が他の方法である。非合法的手段としては他国の財宝を積んだ船舶を強奪することがある。
- 23 Mun, chap.II.
- 24 Wilhite, p.64.
- 25 Wilhite, p.64.
- 26 Davies, p.177.
- 27 Heckscher (1955), vol.II. p.317ff.
- 28 Anderson and Wincoop, p.692.
- 29 Moon, pp.219-222.
- 30 Kindleberger, p.117.
- 31 The Columbia Encyclopedia. "balance of trade,"

蔵谷哲也

抄 録

重商主義はしばしば互いに矛盾した考えの集合である。しかし、概して言えば、その主張は一国の富は貴金属の量からなり、その富を増加させる手段は貿易収支の黒字を維持することである。現代経済学の教科書の教えに反しているが、今日でも重商主義の考え自体は人々の心の中に根強く存在している。

キーワード：重商主義，マーカンティリズム，貿易差額